

習熟度の異なる日本語学習者の合意形成談話 における接続表現

— 否定的応答と合意形成過程に着目して —

伊藤 亜希
(2016年10月6日受理)

Conjunctive Expressions among Japanese Learners at Different Proficiency Levels
in Problem-Solving Discourse:
Negative Responses and the Consensus-Building Phase

Aki Itoh

Abstract: The current study compared the use of conjunctive expressions to indicate disagreement by native and non-native speakers of Japanese during a problem-solving task. Three levels of English-speaking learners of Japanese were asked to work in pairs to find a solution to a given problem. A group of native speakers were asked to perform the same task. The conversation during the task was audio-recorded and transcribed for analysis. The results revealed that the learners often used conjunctive expressions in expressing a lack of agreement, while native speakers used very few. High-intermediate learners predominantly used the adversative conjunction *demo*, while advanced learners used other conjunctive expressions, such as *kedo* and *kara*, in addition to *demo*. In the consensus-building phase, native speakers often delayed their responses to prompt their interlocutors to adjust their opinion. In contrast, advanced learners used *demo* for the same purpose, while high- and low-intermediate learners used *demo* and *kara* excessively.

Key words: Japanese learner, problem-solving discourse, conjunctive expressions, disagreement, conflict

キーワード：日本語学習者，合意形成談話，接続表現，不同意，対立

1. はじめに

日本語学習者は、日々の生活において自らの意見を述べ、相手の意見を聞き、話し合っ合意を目指さなければならない場面に直面することが多い。このような合意形成場面においては、相手の意見に対して不同

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：畑佐由紀子（主任指導教員）、白川博之、
深澤清治、永田良太

意を表明しなければならないことがある。しかしながら、不同意の表明は相手のフェイスを侵害する可能性がある一方、親密さを示す機会でもあり、対話者との関係や場面によって複雑かつ多様な構造をとるとされる（Angouri, 2012; Sifianou, 2012）。このような不同意表明は複雑な体系をとるため、学習者にとっては相手に意図しない含意を伝えてしまう恐れがある。しかしながら、不同意発話、その中でも特に合意形成談話を対象とした不同意に関してはまだ解明されていない点が多い。学習者の語用論的能力の特徴や発達を明らかにするためにも、場面を特定した不同意発話に着目

した研究が必要であろう。

不同意を表明する際は、まずどのような内容を伝えるかが重要である。堀田・吉本(2013)や倉田・楊(2010)などは、意味公式を用いて分析を行い、学習者は母語話者とは異なり保留を行えないこと、理由説明を多用することなどを指摘している。しかしながら、学習者にはどのような言語表現を伴わせながら不同意を表明するかは難しく重要である反面、指導という点から鑑みると取り入れやすい。そこで、本研究では日本語学習者が合意形成談話で提案に対しどのように不同意を示し、合意を形成していくのか、接続表現に着目して習熟度別に特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

日本語母語話者は対立を避ける傾向があるとされるが、近年の研究では、必要に応じて緩和させつつも対立を示すことが指摘されている(Honda, 2002; 高宮, 2008)。日本語母語話者を対象とした根本(2004)は、不同意の表明方法として「目的達成型」と「対人関係配慮型」とに分類できるとしている。前者は反対意見を「でも」「いや」上昇調の「えー」という談話標識などを用いて自らの発話意図を効果的に相手に伝達するという特徴を持つ。一方、後者は相手に配慮を示すという特徴を有し、否定的な応答の前に一度容認をする、緩和表現などを用いて意見を弱めたりほかしたりする、笑いによって親しみの気持ちを表すといった方法が用いられるとしている。他にも相手の意見と異なる意見を表明する場合は一度同意を示したりためらいや沈黙をおいたりすることで不同意を遅延させること(Pomerantz, 1984; Mori, 1999)、相手の反応を伺うことで不同意が示される可能性を予測した場合は自らの意見を調整すること(Mori and Nakamura, 2008)などが報告されており、複雑な構造を用いながら互いの考えを共有させていくことがわかっている。

さらに自然会話での同意、不同意発話と接続表現の使用に着目したMori(1999)は、不同意を示す際には逆接続表現「でも」「けど」、理由を示す「だって」「から」といった接続表現が伴うことを報告している。「でも」は前後の発話を対立させたり、直前のターンで発話された内容から視点をシフトさせたりする機能があるとされる。また、従属節の末尾に「けど」を付加して主節を省略することで、従属節を際立たせ、暗示的に不同意を示したり、部分的な同意を示したりすることができるとしている。「から」は全面的な同意を理由とともに示す機能があるが、不同意の連鎖では例外を示したり、注釈を加えたりする際に使用され、全面的に

同意できないことを伝える様子が観察されている。一方、「だって」は相手の意見に対する不同意を説明とともに強く主張する際に使用されるとしている。このように、接続表現を用いることで相手の意見に対する自己の立場を明確にしたり、議論の対象を移行させたりすることができる。それだけではなく、「から」や「けど」に従属節で用いることで、主節を述べることなく相手とは異なる立場を暗に示すことができるとしている。しかしながら、不同意を示すにあたり接続表現は必ずしも使用しなければならないわけではない(Mori, 1999: 93-94)。つまり、どのような接続表現をどの位置で使用するかだけでなく、接続表現を用いて対比を示すか否かという点も、不同意を表明するにあたり重要となる。

日本語学習者の合意形成談話における不同意発話を対象とした堀田・吉本(2013)は中国語を母語とする上級日本語学習者を対象に、不同意の構成要素を分析している。この研究では学習者と母語話者の接触場面における合意形成を行う談話を分析した結果、学習者は母語話者よりもヘッジを用いた意見が少ないこと、不同意の主要部前に意見保留が行えないことを報告し、学習者はより直接的に反対意見を主張する傾向にあると述べている。同じく中国語を母語とする中上級日本語学習者の不同意発話を対象とした倉田・楊(2010)においても、学習者は基本的に一つの発話によって意見を表明する傾向にあり複雑な構成ができないこと、判断保留をあまり用いないことが報告されている。

合意形成談話における言語形式に着目した楊(2014)では、主にモダリティ表現を対象に分析を行い、学習者は母語ほどモダリティ表現を使用せず、断定的に意見表明を行うことを明らかにしている。しかしながら、「けど」「が」を用いた言いさし表現は母語話者より多いことが示された。

3. 本研究の目的と研究課題

以上の先行研究から、日本語母語話者は様々な表現を用いて対立を表明したり緩和したりしていることが明らかとなっており、その様相が多様であることがわかっている。その際、特定の接続表現を伴って使用されることがあることもわかっており、相手の発話と関連付けながら自らの意見を主張していくことがわかっている。一方、日本語学習者を対象とした研究では、母語話者とは異なる意味公式を用いて不同意を表明すること、母語話者ほどモダリティ表現が使用できず断定的に意見表明をされるとされる。

しかしながら、学習者がどのような表現を用いて対

立を緩和させながら不同意を表明しているのかは、十分に明らかになっていない。まず、不同意の表明には接続表現が関係あることが指摘されているが、言いさし表現を除いて接続表現に着目した研究は行われていない。また、先行研究のほとんどは分析対象が不同意発話のみとなっており、不同意が表明されたのちにどのように両者が意見を調整するのか、その時どのような言語形式が用いられるのかにまでは着目されていない。特に、意見を調整する中では自身の考えを相手に強く断定的に伝えるのか、もしくは質問形式や否定疑問文によって相手の反応を求めながら伝えるのかで、大きくその様相が変わってくるだろう。加えて、先行研究では中上級～上級学習者を対象とした研究がほとんどで、習熟度による相違には着目されておらず、学習者の傾向が習熟度によってどのように変化するか、それぞれの習熟度において学習者が困難とする表現が何かは明らかになっていない。

そこで本研究では、合意形成談話ですぐに同意を示さない場合、つまり不同意表明をする場合、学習者がどのような接続表現をどのように用いて会話を進めていくのかを日本語母語話者との比較を行いながら検討することを目的とする。

以上のことを踏まえ、本研究の研究課題として、以下の4点を挙げる。なお、本研究での「不同意」は、相手の意見に反対であることを示す「否定的応答」とすぐに明確に同意を示さない「応答の遅延」の2種類が含まれるものとする。

- (1) 学習者は否定的応答を示す際、どのような接続表現をどの程度使用するのか。
- (2) 学習者は合意形成を行う際、どのような接続表現をどの程度使用するのか。
 - (2.1) 否定的応答後の合意形成過程の場合
 - (2.2) 応答の遅延後の合意形成過程の場合
- (3) (1)と(2)は習熟度によってどの程度変わるのか。
- (4) (1)と(2)は日本語母語話者と相違がみられるのか。

4. 調査概要

4.1 データ

対象者は、米国の大学で開催された夏期集中講座を受講中の英語を母語とする日本語学習者、上級6名、中級後半10名、中級前半12名であった。学習者の習熟度は講座開始時に行われたプレースメントテストをもとに決定された。日本語母語話者は日本在住の大学生・大学院生の20名を対象とした。学習者のペア、母語話者のペアはすべて同じ教室で学習しているもの同士、または友人同士であった。合意形成談話を引き出した

めに、チャリティーイベントの内容を決定するというタスクを使用した。決定が必要な項目として、「イベントの内容」「場所」「参加者の集め方」「日時」「参加費」「寄付金の有無」の6項目を設定した。

4.2 分析方法

まずタスクを遂行するために決定が必要な6項目に対して具体的な案を提示している発話、肯定的な評価を下している発話を「提案」とし、その具体案について議論する一連の発話をひとつの連鎖として抽出した。次に、提案に対して対話者がすぐに明確に肯定的な立場を示したやりとりを「同意の連鎖」として、すぐに明確な同意が現れなかった発話を「不同意の連鎖」として抽出した。

次に、不同意の連鎖の中から、提案に対して否定的な立場や問題点の提示、他の案を示すものを「否定的な応答」として、すぐに明確な応答をせず沈黙や笑い、相槌、部分的な同意 (partial agreement)、繰り返しや質問などをするものを「応答の遅延」として分類した。イントネーションや発話の強さなども考慮した。さらに、「否定的応答」、「応答の遅延」後にすぐにやりとりを終了せずに合意形成に向けて話し合う一連の流れを「合意形成過程」とした。途中、議論に関係ない内容の確認や語彙の確認などを行った発話は「合意形成過程」から除外した。その後元々の議論に戻った場合はそれまでの議論と連続した連鎖として分類、異なる内容に関して話し合いが行われた場合は別の連鎖として分類した。なお、ある提案に対して応答の位置で異なる案が提示された場合は「否定的応答」としたが、ある案に対しての議論が終わり、他の案についての議論が始まった場合は新たな連鎖が開始したものと解釈して分析を行った。

最後に、「否定的応答」「合意形成過程」を接続表現の使用の有無と種類を集計した。接続表現は Mori (1999) が指摘した不同意表明に関連がある「でも」「けど」「から」「だって」に着目することとする。「から」「けど」に関して Mori (1999) では節末に置かれたものに主に注目していたが、本データでは文頭の「だから」も散見された。「だから」は、結論を導き出すだけではなく、対話特有の相手の発話意図の明確化を求めたり正しい理解を求めたりする機能もある (蓮沼, 1991)。このような機能は不同意表明や合意形成過程に影響を与えると考えられるため、本研究では分析対象に含めた。ただし、学習者が対話特有の機能を理解し、使用していると判断できないため、文頭の「だから」と文中の「から」を同様に扱い分析を行うこととした。そして、それぞれの群で対象とした接続表現がどのように使用されているのか、どのような相違があ

るのか、質的に分析を行った。

5. 結果と考察

5.1 不同意発話の総数

まず、日本語母語話者、学習者それぞれで不同意の連鎖の中に否定的応答と応答の遅延がどの程度あるのか集計した(表1)。

表1 「否定的応答」と「応答の遅延」の割合
(括弧内は頻度)

	JNS	上級	中級後半	中級前半
否定的応答	31% (23)	38% (6)	34% (15)	16% (3)
応答の遅延	69% (51)	62% (10)	66% (29)	83% (15)
合計	100% (74)	100% (16)	100% (44)	100% (18)

その結果、日本語母語話者は不同意連鎖の中に否定的応答が31%(一組あたり2.3回)、応答の遅延が69%(5.1回)であった。上級学習者は否定的応答が38%(2.0回)、応答の遅延が62%(3.3回)、中級後半学習者は否定的応答が34%(3.0回)、応答の遅延が66%(5.8回)、中級前半学習者は否定的応答が16%(0.5回)、応答の遅延が83%(2.5回)であった。

不同意発話中の否定的応答の割合は中級前半学習者が低かったが、他の習熟度の学習者は日本語母語話者と大きな相違は見られなかった。しかし、日本語母語話者は否定的応答が生じないペアが3組あり、個人差が大きい可能性がある。中級前半の学習者は一組あたりの回数に着目すると、不同意連鎖自体の数が少なく、そもそも不同意を表明せずすぐに同意をする傾向があることがわかった。

5.2 不同意発話における接続表現の使用数

次に、5.1で抽出した不同意のうち否定的応答ではどのような接続表現がどの程度使用されているのかを算出した(表2)。

表2 否定的応答を示す際の接続表現の使用の割合
(括弧内は頻度)

	JNS	上級	中級後半	中級前半
でも	4% (1)	33% (2)	33% (5)	0
けど	4% (1)	33% (2)	0	33% (1)
だって	0	0	0	0
から	0	33% (2)	7% (1)	0

表2のように、日本語母語話者は否定的応答をする際は「でも」「けど」が1回のみと、ほとんど接続表現を使用しないことがわかった。一方学習者は、回数は少ないものの、上級学習者は否定的応答のうちの3分の1には「でも」「けど」「から」が使用されることが

わかった。そして中級後半学習者は「でも」の使用に偏っていること、中級前半学習者は「けど」を1回しか使用していないことがわかった。

5.3 合意形成過程における接続表現の使用数

合意形成過程は、応答者が否定的応答をした後のやり取りと遅延をしたやり取りの後とで大きく二分できるため、それぞれの連鎖で接続表現を抽出した。また、合意形成過程では大きく最初の案を出した提案者とそれに答える応答者という役割があると考えられるが、本調査のデータを概観したところ、途中で応答者が別の案を出して提案者と応答者の役割が入り乱れたり、提案者が自分の意見に対して問題点を述べたりするなど、会話参加者の役割が多様であるため両者を区分せずに算出することとした。

まず、否定的応答後の合意形成過程での接続表現に着目する(表3)。

表3 否定的応答後の合意形成過程における接続表現の使用の割合(括弧内は頻度)

	JNS	上級	中級後半	中級前半
でも	39% (9)	100% (6)	47% (7)	25% (1)
けど	26% (6)	50% (3)	20% (3)	0
だって	13% (3)	0	0	0
から	22% (5)	50% (3)	60% (7)	0

否定的応答の後の合意形成過程では、日本語母語話者は合意形成過程の総数のうち39%の割合で「でも」、26%の割合で「けど」を使用し、また22%の割合で「から」を、13%の割合で「だって」を使用していた。学習者は、上級学習者では「でも」が100%、「けど」「から」が50%と、中級後半学習者では「でも」が47%、「けど」が20%、「から」が60%の割合で使用されていた。中級前半学習者は「でも」が1例観察されたのみであった。全体的な傾向として「でも」が多く使用されていたが、学習者は習熟度が高くなると接続表現の使用割合が高くなっていった。「だって」に関しては日本語学習者にしか見られなかった。

次に、応答の遅延後の合意形成過程における接続表現の使用割合を算出した(表4)。その結果、日本語母語話者では「でも」が55%、「けど」が49%、「だって」が6%、「から」が63%の割合で使用されていた。学習者では、上級学習者では「でも」「けど」が30%の割合で、「から」が50%の割合で使用されていた。次に中級後半学習者では「でも」が90%で、「けど」が41%で、「から」が100%の割合で、中級前半学習者では「でも」が100%、「けど」が43%、「から」が93%の割合で使用されていた。上級学習者の使用割合が一番少なく、次に日本語母語話者の使用割合が多かった。中級後半学

表4 応答の遅延後の合意形成過程における接続表現の使用の割合 (括弧内は頻度)

	JNS	上級	中級後半	中級前半
でも	55% (28)	30% (3)	90% (26)	100% (14)
けど	49% (25)	30% (3)	41% (12)	43% (6)
だって	6% (3)	0	0	0
から	63% (32)	50% (5)	100% (29)	93% (13)

習者と中級前半学習者は「でも」「から」の使用が多く、傾向が類似していた。「だって」に関しては、日本語母語話者のみにみられた。

表3と表4を比較すると、日本語母語話者は否定的応答後より遅延後の方が接続表現の使用が多かった。一方学習者は、上級だと否定的応答後の方が接続表現の使用が多かったが、中級後半、中級前半の学習者は応答の遅延後の方が接続表現が使用される傾向にあることがわかった。

5.4 否定的応答の質的分析

5.3で示したように、否定的応答では日本語母語話者は接続表現が使用されることがほとんどなかった。中級前半の学習者は否定的応答の回数が少ないため言及はできないが、習熟度が高い学習者では接続表現の種類と数が増える傾向が見られた。日本語母語話者と学習者との差異を明らかにするため、質的分析を行った。

まず、日本語母語話者の接続表現が使用されていない会話例 (1) をあげる。

会話例 (1)¹⁾²⁾ 日本語母語話者の否定的応答

- 1 JNS10-1: やっぱ、スポーツ大、会?
 2 JNS10-1: (0.6) なんか: : , (2.0) あと, (0.7) 海とか。

ここでは1行目で「スポーツ大会」という提案がされるが、2行目で「海」という場所を示し、そこで何かしらのイベントを行える可能性を示すことで、相手の提案に対して否定的な応答をしている。その際、緩和表現「なんか」や沈黙を用いて応答を遅延させている。このように日本語母語話者は接続表現を用いずに異なる案を提示することで否定的応答を緩和させている様子が窺えた。

上級学習者と中級後半学習者は否定的応答を示す際、母語話者より接続表現を多く使用する傾向があった。上級学習者の接続表現が含まれていた会話例として会話例 (2) を挙げる。

会話例 (2) 上級学習者の否定的応答

- 1 A2-1: お菓子作りは。
 2 A2-1: まあそれで。
 3 A2-2: でも、これ ((ディナーショー)) とこれ ((お菓子)),
 4 結構安く catering を、やってくれとこを見つけたら、
 5 こっち ((ディナーショー)) の方が一番得すると思うけど。
 6

1行目でタスクシートに書かれている「お菓子」と

いう案についての意見を求めている。2行目でその案がイベントの内容として妥当だと意見を表明しており、提案として機能した発話となっている。応答者は3行目からその提案に対して他の案の利点を述べることで、否定的応答を示している。その発話の冒頭に「でも」を置くことで対立が際立っている反面、発話末尾に「けど」を置き主節を省略することでその反対意見の明示を避け、対立が緩和されていることがうかがえる。

中級後半の学習者の発話においても同様に「でも」を用いながら否定的な応答を示すことがわかり、逆接表現の接続表現を用いて対立を示しながら自らの意見を主張することがわかった。しかしながら上級で見られた「けど」は観察されず、端的に対立意見を表明する傾向があることがわかった。

5.5 否定的応答後の合意形成過程の質的分析

日本語母語話者が否定的応答後での合意形成過程において使用する接続表現の数は応答の遅延後の合意形成過程よりも少なかった。また、学習者と比較しても種類は豊富なものの、それぞれの使用割合は低いという特徴が見られた。そこでまず、否定的応答後で日本語母語話者が接続表現を使用せずに合意形成を目指す過程を観察する。

会話例 (3) は、イベントの内容について話している会話である。

会話例 (3) 日本語母語話者の否定的応答後の合意形成過程

- 1 JNS2-1: 9時。
 2 JNS2-2: (0.8) 朝から走って昼ごはんを食べるか、昼から走って、(0.6) 晩御飯のもの、[(に)]
 4 JNS2-1: [晩御飯、寒すぎるよ
 5 JNS2-2: よね、朝から走って昼ごはんか=
 6 JNS2-1: う: : んじゃじゅ: : 時から, (1.5) 15時ぐらい。

1行目での9時からマラソンイベントを開始するという案に対し、応答者は相手の意見「9時」を内包する「朝から走って」という案と「昼から走って」という案を並べ立てている。他の案を並列させることで相手の意見にすぐさま同意できないことが示され、否定的な応答が述べられている。最初の提案者は4行目で相手が新たに示した案を選択し、6行目で合意に至っている様子がわかる。

このように、日本語母語話者の否定的応答後は意見の対立が生じないことが多かった。むしろ、応答者が相手の否定的応答で提示された他の案や問題点をすぐに受け入れて連鎖が終了する様子が観察されたため、接続表現の使用が少なかった。日本語母語話者が明確に相手の提案を否定する場合は、それが受け入れられる可能性が高いと判断した時だからではないだろうか。また、否定的応答を示す際、異なる案を示す場合

は会話例(1)のように緩和表現や並列をしめす「とか」を使用したり、会話例(3)のように相手の意見も繰り返して明確に否定しなかったりと、対立が生じないよう発話している。否定的応答自体が対立を回避しようとしているため、否定的応答後の合意形成過程においても対立が明示されないであろう。

次に、学習者の特徴を記述する。まず、上級学習者は会話例(4)のように高い割合で接続表現が使用されていた。

会話例(4) 上級学習者の否定的応答後の合意形成過程

1 A3-1: 参加費, もちろんあ[リ]:
 2 A3-2: [な, なしでしょ? なし.
 3 A3-2: (1.7) こーこーこういうのもので, お金もうける.
 4 A3-1: あそうそうそうそう.
 5 A3-2: (0.4) あ, あの, ありにしたら, [なんかのりー
 6 A3-1: [でも<10ドルにし
 7 たら'どうですか'.
 8 A3-2: でもそれしたら>なんか乗る物とか,
 9 (0.6) [なんか: [やることがないと.
 10A3-1: [ん:::
 11A3-2: (0.7) 来ないと思います[:.
 12A3-1: [そうですね::
 13A3-1: じゃ, 'なしにしよう'.
 14A3-2: 'うん'まチャリティーだからね:

会話例(4)では、参加費の有無について1行目で提示された案に対し2行目で即座に否定的な応答がされている。その後、4行目で提案者は相手の反対意見に対して理解を示したものの、6行目から「でも」とともに相手の案に譲歩した少額という形で、最初の自分の提案に寄り添った再提案を行っている。それに対して応答者は、「でも」を用いながら相手の意見の問題点を挙げており、両者の意見が際立って対立している。その後、11・12行目で提案者が応答者の意見を受け入れることで対立が終了し、最後に応答者が自分の意見を支持する「チャリティーだから」と理由を伴わせながら合意に至ったことが示されている。

このように上級学習者は、両者が互いの意見を主張しながら「でも」を用いて対立を明示している様子がかがえる。さらに、「から」を用いて自分の意見の正当性の主張も行っていった。

次に、中級後半学習者に着目する。この習熟度では、「でも」「から」の使用が多かったが、それはIH3のペアに突出して見られた。それが含まれる連鎖を挙げる。

会話例(5) 中級後半学習者の否定的応答後の合意形成過程

1 IH3-2: あの, この2ドルの代わりに, あの, ま, 5ドル,
 2 Tシャツのための.
 3 IH3-1: たぶん, でもシャツを作ると10ドル, そして,
 4 あの
 5 IH3-2: そうだね.:, ま, じゅう, ん:::10ドル,
 6 そして, あの
 7 IH3-1: でも普通シャツを作るために, たぶん

((中略))

11IH3-1: たぶん, 15, か20ドル[は要ると思う
 12IH3-2: [ま, 日本, 日本学校の
 13 シャツは10ドルだったけど=
 14IH3-1: =はい, はい
 15IH3-2: たぶん先生[方は
 16IH3-1: [でも, このイベントで, えっと, 私た
 17 ちは, えっとお金が, ま作り[たいだから, だから
 18IH3-2: [あ:::, そうそう,
 19 まあね.
 ((省略))

会話例(5)では、イベントの参加費として徴収することが決まった2ドルの代わりに5ドルをTシャツ代として集めることが1行目で提示されている。その案に対し、3行目でTシャツは10ドルだから難しいという内容を「でも」を用いて反対意見であることを強調しながら否定的な応答を述べている。その後、さらに7行目でも「でも」を用いて一般的なTシャツの値段に触れ、対立を明示している。そしてその値段に対して12・13行目で自分たちが所属する日本語学校でのTシャツの値段を「けど」を用いながら述べ、相手の意見には全面的に同意できない旨を表明している。そして16・17行目でお金を集める重要性を「でも」「から」を用いて説明し、相手の意見を受け入れられないことを理由を示しながら述べている。この後も「でも」「から」を複数回用いながら、Tシャツを作る重要性や他の案を提示したりしていた。

このように中級後半の学習者も多様な接続表現を用いながら相手の説得や自分の意見の主張を行えるペアもあった。ただ、この連鎖に突出して見られたため、全体的な傾向とは言い難い。しかしながら、上級学習者の結果も合わせて考えると、ある程度習熟度が高くなると、多様な接続表現を用いながら合意形成に向かいやり取りを行っていることがわかる。否定的応答で対立が示されたのち、それぞれが自分の意見の妥当性を「でも」を用いて対立を明示させながら、発話末尾に「けど」「から」を付加させ言いさしによって否定的なコメントを回避させるポライトネスストラテジーを用いながら(三牧, 2015)、やりとりを進めることがわかる。中級後半の他のペアにはこのような接続表現の使用は少なかったが、すぐに同意が得られた連鎖があったことに加え、「と思います」といった言い切りの発話がされる傾向があったことが原因だと考えられる。接続表現を多用しながら両者の意見を対比させたり、否定的な意見を暗示させたりするのは、ある程度の習熟度が必要だと言えるだろう。

5.6 応答の遅延後の合意形成過程の質的分析

日本語母語話者は応答の遅延後の接続表現の使用が否定的応答後とは異なり多かった。会話例(6)はその例のひとつである。

会話例 (6) 日本語母語話者の応答の遅延後の合意形成過程

1 JNS5-2: え, 午前中やる?
 2 JNS5-1: (0.6) あ: : : : [いや, [星から
 3 JNS5-2: [星から, [でも午前中やって
 4 ってお昼に終わる感じがいいよね.
 5 JNS5-1: (1.1) あ, そう [なんだ
 6 JNS5-2: [終わればだけど
 7 JNS5-1: (1.3) じゃあ10時から12時半とか?
 8 JNS5-2: (0.6) 9時半開始で: : :
 9 JNS5-1: うん
 10 JNS5-2: 12中に終わろう [よ.
 11 JNS5-1: [あ: : , いいよ.

ここでは1行目でイベントを午前中に行うことが提案されているが, 2行目ではすぐに応答が示されず, 下降調で考えるように「あ: : : :」と発話され応答が遅延している。それを受けて, 提案者は3行目で自分の提案内容とは異なる意見に言及している。しかしながら, 続けてその調整した案に反して最初の案を支持する発話を「でも」をとともに述べている。一度相手に譲歩したように見せた点では対立が緩和されていると言えるが, 「でも」を用いたことで最初の意見を強く押し出していることがわかる。しかしながら6行目で「けど」を用いて自分の案が予想通りに進まない可能性にも言及し, 主張が弱められていることがわかる。

日本語学習者の合意形成過程では, 接続表現は会話例 (6) の「けど」のように相手の意見を攻撃したり自分の意見を擁護するだけではなく, 自分の意見の問題点に言及したり限定化したりする際にも見られた。このように, 応答が遅延された場合は, 否定的応答が示された場合とは異なり, 会話参加者が互いに提案内容を吟味し, 徐々に不同意や反対意見を提示していくため, 接続表現が多く使用されたと考えられる。

上級学習者は母語話者や他の学習者と比較すると, 接続表現の使用が少ない傾向にあった。以下がその例である。

会話例 (7) 上級学習者の応答の遅延後の合意形成過程

1 A3-1: 場所, 公園?
 2 A3-2: (0.7) うん.
 3 A3-1: 公園?
 4 A3-2: いいと思います。平和なんちゃら公園。
 5 A3-1: えっと: : フリーマーケットはだいたい外ですから
 6 A3-2: そうだね。外じゃないとちょっと高いかもしれないね

会話例 (7) では, 1行目でイベントを行う場所が提示されるが, 2行目で明確に応答は示されず, 「うん」という形式上の同意 (token agreement) が示されるのみとなっている。提案者はそれが同意と読み取れなかったのか, 3行目で再び同じ発話を繰り返している。その後, 4行目で肯定的な応答と提案の具体化が行わ

れ, 提案者も5行目で「から」を用いながら自分の案の理由を提示することで, 合意に向かい連鎖が進められている。

この例以外にも, 弱い同意によって提案者が詳細な説明を始めたり, 相手に意見を求めたりする連鎖が見られた。弱い同意や形式上の同意は不同意の前兆となるため (Pomerantz, 1984; Mori, 1999), 応答が遅延したと会話参加者に受け取られる可能性がある。上級学習者は3組とデータが少ないため断言できないが, 応答が遅延した際は否定的応答が示された場合とは異なり応答者の立場が明確でないため, 提案者がその意図を汲み取りかねてしまい, 議論が活発に行われず, 接続表現の使用が少なかった可能性, また単なる確認であったためその後の議論が必要でなかった可能性が考えられる。

次に, 中級後半学習者と中級前半学習者は, ペアに偏りはあったものの, 「でも」「から」が多く使用されていた。それが含まれる連鎖を提示する。

会話例 (8) 中級後半学習者の応答の遅延後の合意形成過程

1 IH4-2: あの, (1.9) <9月> : : : : >
 2 IH4-1: (1.0) *9が [つ () ?
 3 IH4-2: [くつい, たち, くらい? >
 4 IH4-1: え: : ((中略)) お菓子: とかあの甘いもののため
 5 に一番いい時間でしょう?. だから, (.) そういう寒
 6 い () (.) が一番いい
 7 IH4-1: (1.5) では: : , (2.4) 9月?
 8 IH4-2: hhh 9月や5月: , だと思います: 5月は卒業: ,
 9 の, あの: : , 時: : ですから: : たくさん
 10 [人が: : , [来ます
 11 IH4-1: [みんなはちょっと, [うれし
 ((中略))
 16 IH4-1: え: : : , あの9月だったら: ,
 17 IH4-2: 9が [つは
 18 IH4-1: [5月よりみんなちょっとあ: : 知らない, つとか,
 19 [あの: : 友達もいないだから: : , たぶん: :=
 20 IH4-2: [ん: : :
 21 IH4-1: =あの, みんな, 「あ: : 友達: :」でも, 一緒に: : ,
 22 あの: : お金を: : あげろ, あげよう [おも-
 23 IH4-2: [でも5
 24 月: : , は: : あの, .hhh 大学, の: : あの, 終わ
 25 る時だから: : , .hh みんなは: : あの一生懸命勉
 26 強しています.
 ((省略))

まず会話例 (8) では, 1行目から3行目まででイベントの日時が提案されている。応答者は2行目で小さい声で提案を繰り返すのみで, 明確に応答がされていない。それに続けて4行目から応答者がイベントの内容であるお菓子売る活動は寒い時期が一番いいと「から」を用いながら述べているが, それが提案を支持するものかは判断できない。その後1.5秒の沈黙が生じ, 会話が停滞するが, 応答が遅延させた IH4-1 が7行目で再び最初に提案された「9月」を挙げ, 合意を要求している。最初の提案者は8行目から最初の案「9

月)に加え、他の案「5月」を「から」を用いながら理由とともに示している。応答者は16・18・19行目で「から」を用いて理由を示しながら、「5月」という案に同意する案を出そうとしているようだが、21行目の「でも」が何を意味するかは発話が途中で終わっていることから読み取れない。さらに最初の提案者は23行目で「でも」を用いて自分があげた「5月」という案を否定する意見を出している。

このようにすぐに合意形成ができない会話では「でも」「から」が多用されながら、互いに様々な意見に言及しながら会話が展開されていた。しかしながらその接続表現が何を意味するのかが明確でなく、過剰使用もされており、適切な使い方とは言えない様子もうかがえた。

次に中級前半の学習者の会話例(9)を挙げる。

会話例(9) 中級前半学習者の応答の遅延後の合意形成過程

1 IL1-1: 7がちゅ, 7月何日? 31日?
 2 IL1-2: 1日だけ? か, あの
 3 IL1-1: たぶん1日だけ
 4 IL1-2: (2) あ
 5 IL1-1: だから週末, 私の意見で, 週末, の日は一番便利
 6 かもしれない, 人々は, もっとひまな時間がある
 7 し: :, あの. ん: :, ね? =
 8 IL1-2: 私の意見は反対, [あの,
 9 IL1-1: [そう, どうして?
 10 IL1-2: えっと平日で, え: : っと, あ: :, なんか, 人々
 11 は, え: : っと, 普通のところに行くから, あの,
 12 図書館, 食堂. でも, 週末で, ダウンタウンに行
 13 く, [ところ
 14 IL1-1: [だから
 15 IL1-2: ほかのところに行くから,
 16 IL1-1: うん
 17 IL1-2: えっと, サインを見ない, 見なくて.
 18 IL1-1: でも, IL1-2さんは, 今, その人はダウンタウン
 19 に行く, かもしれないと言ったから, だから, そ
 20 れはいい場所, ね?
 ((省略))

ここではまず1行目でイベントの日時が提示されるが、応答者はイベントが1日しか行われぬのかと前提の確認を行っている。その後、最初の提案者が5行目から文頭に「だから」を用いて3行目の「1日だけ」に続けようとしているのか、週末がいい日時であると理由とともに説明している。一方応答者は8行目で明確に反対意見を示した後、10行目から「から」を用いながら平日の方が利点があることを示そうとしている。12行目で「でも」を用いて平日の利点と週末の欠点を比較して述べている。そして最初の提案者は18行目で「でも」を用いて相手の理由を使うことで自分の意見「週末にダウンタウンでイベントをする」を示そうとしている。

このように中級後半、前半の学習者は長い連鎖の中で「でも」「から」を多用しながら相手の説得を試み

ようとしていた。しかしながらその使用状況は日本語母語話者や上級学習者とは異なっており、適切とはいえない。意見を主張することを一番の目的にしているため、過剰に接続表現を用いた可能性が考えられる。また、中級後半、前半それぞれの中の2組は接続表現の使用があまり見られなかった。それらのペアは議論を深めずに合意に至ったためであるとも考えられるが、接続表現の使用には個人差が影響する可能性もある。

中級前半は否定的応答自体が少なかったため、否定的応答後の合意形成過程と応答の遅延後の合意形成過程との相違はわからないが、中級後半学習者は応答の遅延後の方が接続表現の使用が多かった。これは、会話例(8)のように接続表現を多用しながらそれぞれが意見を主張しあった結果だと考えられる。

なお、本調査には学習者から「だって」が全く使用されていなかった。日本語母語話者の「だって」の使用例として会話例(10)を挙げる。

会話例(10) 日本語学習者の「だって」の使用

1 JNS5-1: じゃ来月じゃね。
 2 JNS5-2: (1.0) 来h月h: ?h
 3 JNS5-1: (0.3) あ, 早い, バタバタする?
 4 そんな[もんじゃなくて?
 5 JNS5-2: [1ヶ月で準備できる?
 6 JNS5-1: あ, そう[なんじゃ
 7 JNS5-2: [人を集めんといけんのんよ, だって

この断片ではイベントを行う月が1行目で提示されているが、応答者が2行目で笑いを伴いながら大きな声で相手の提案を上昇調で繰り返し、強く否定的な応答をしている。その後、5行目で相手の案の問題点を、7行目で発話末尾に「だって」を伴わせることで提案が問題である理由を際立たせながら述べている。

日本語話者の「だって」の使用数も多くはなかったが、この例から相手の意見に対して理由を示しながら強く反論する、自己正当化するなど(大津, 2013)、対立を強く示す機能があることが窺われる。2行目での強い否定的応答とも結びつき、自分の意見を強く主張する役割を担っている。学習者が強く不同意を示す場合は「でも」を使用して相手の意見に反論することどまっていたが、「だって」のように自分の意見を理由とともに強く示す連鎖も構築できるようになれば、単一的な表現が多様になるだろう。互いが意見を述べ合い議論を深めていくためには、このような表現も重要であると考えられる。

6. まとめと今後の課題

本研究では合意形成談話における学習者の接続表現

の使用を明らかにするため、否定的応答と合意形成過程に着目して分析を行った。その結果、以下の点が明らかになった。

- (1) 学習者は否定的応答をする際、日本語母語話者より「でも」を多用する傾向にあること
- (2) 否定的応答をする際、習熟度が上がるにつれ「けど」「から」といった接続表現を伴わせ相手の意見に反論できるようになること
- (3) 合意形成過程に着目すると、日本語母語話者は応答の遅延後の方が接続表現を伴わせながら議論を発達させるが、上級学習者は否定的応答後の方が逆接の「でも」を多用して議論を発展させること
- (4) 合意形成過程では習熟度が低い方が「でも」「から」を多用する傾向にあること

英語学習者を対象とした Bardovi-Harilig and Salsbury (2004) では習熟度が低い場合は「no」などを用いて強い不同意を示すとされるが、本研究ではそもそも否定的応答が少なかったこと、また提示されても接続表現があまり使用されないため、強い不同意は見られない傾向にあった。Bardovi-Harilig and Salsbury (2004) とでは習熟度が異なることが原因とも考えられるが、英語学習者と日本語学習者は発達過程が異なる可能性も考えられる。さらに Galaczi (2014) は習熟度の低い学習者は接続表現や指示詞を用いないため、発話と発話に結束性が保てないことが指摘されている。本研究では習熟度が低い学習者は接続詞を多用して議論を深めようとしていたが、それによって発話意図がわかりにくくなるという問題も見られた。上級になるに従って接続表現を的確に使用できていたが、それによって対立が明確化されながら談話が展開されることがわかった。ドイツ語学習者の合意形成談話を対象とした Dippold (2011) でも習熟度が上がると発達したやり取りができるとしているが、日本語学習者のやりとりは日本語母語話者とは様相が異なることが明らかになった。特に、日本語学習者は否定的応答後の合意形成過程では接続表現をあまり使用せずすぐに連鎖が終了する傾向にあったが、応答の遅延後では一度相手の反応を確認して、徐々に接続表現とともに異なる意見を示していくという相違が見られた。相手の反応が予測でき、反論が生じない可能性がある場合は否定的応答を示すが、相手の反応が予測できない場合は相手の様子を観察しつつ、やり取りを進めて対立をできる限り回避するストラテジーを用いているようである。上級学習者は否定的応答時に対立を明示し、それを維持させ「でも」「けど」を用いながら意見を対比させ、合意形成を目指す様子が観察され、合意形成を目指す方法が異なることがわかった。接触場面に

おいてはやりとりの違いによってコミュニケーションに齟齬が生じる可能性が考えられるため、注意が必要であろう。

本研究の結果から、合意形成談話において学習者は日本語母語話者とは異なった接続表現の使用をすることがあきらかとなった。教師はこのような点を踏まえ、談話を意識した言語項目の指導をしていく必要があるだろう。

本研究では、合意形成過程を分析する際、発話の内容を分類しなかったため、自分の意見の擁護や相手の意見への攻撃、自分の意見への問題点を述べる発話など、多様な発話内容を含むものとなってしまった。合意形成過程での接続表現使用を明らかにするためには、どのような発話で接続表現が使用されるのかにも着目する必要があるだろう。

【注】

- 1) 会話例中の JNS は日本語母語話者を、A は上級学習者を、IH は中級後半学習者を、IL は中級前半学習者を指す。また、アルファベットの後の数字はペア番号を、その後の番号は話者を示す。会話例中の接続表現は太字で表記する。
- 2) トランスクリプトの記号は以下の通りである。

	オーバーラップの開始部
=	発話間に感知可能な間が全くない
(0.0)	沈黙の長さ
(.)	0.2秒未満の感知可能な沈黙
.	下降調の抑制で発話
?	直前部分が上昇調の抑制で発話
,	直前部分が継続を示す抑制で発話
<u>下線</u>	下線部が強調されて発話されている
<i>斜体</i>	声が大きくなる
:::	直前の音の引き延ばし
文字-	直前の語や発音が中断されている
°文字°	弱められて発音された発話
<文字>	前後に比べてゆっくりと発話
>文字<	前後に比べて早く発話
.hh	吸気音。笑いや息継ぎなども示す
hh	呼気音。笑いやため息なども示す

【参考文献】

- 大津隆広 (2013) 「「だって」の語用論—正当化, 同意, 情意のコンテクスト-」『日本語学』32(6), 100-111.
- 倉田芳弥・楊虹 (2010) 「討論における日本人学習者と日本語母語話者の不同意表明の仕方: 構成要素の

- 観点から』『言語文化と日本語教育』39, 158-161.
- 梶本綾子 (2004) 「提案に対する反対の伝え方—親しい友人同士の会話データをもとにして—」『日本語学』23(10), 22-33.
- 高宮優実 (2008) 「日本語母語話者のミーティングにおける会話の分析」畑佐由紀子 (編) 『外国語としての日本語教育—多角的視野に基づく試み』pp. 283-302, くろしお出版
- 蓮沼昭子 (1991) 「対話における「だから」の機能」『姫路独協大学外国語学部紀要』4, 137-153.
- 堀田智子・吉本啓 (2013) 「中国人日本語学習者の『不同意』行為—構成要素と発話の連鎖の考察—」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』8, 39-47.
- 三牧陽子 (2015) 「言いさしに見るポライトネス」『日本語学』34(7), 26-37.
- 楊虹 (2014) 「話し合いにおける不同意表明発話のモダリティ—日中接触場面と中国語・日本語母語場面の比較から」『鹿児島県立短期大学研究年報』46, 87-102.
- Angouri, J. (2012). Managing disagreement in problem solving meeting talk. *Journal of Pragmatics*, 44(12), 1565-1579.
- Bardovi-Harlig, K., & Salsbury, T. (2004). The organization of turns in the disagreements of L2 learners: A longitudinal perspective. In D. Boxer & A. D. Cohen (Eds.) *Studying speaking to inform second language learning* (pp. 199-227). Clevedon: Multilingual Matters.
- Dippold, D. (2011). Argumentative discourse in L2 German: a sociocognitive perspective on the development of facework strategies. *The Modern Language Journal*, 95(2), 171-187.
- Galaczi, E. D. (2014). Interactional competence across proficiency levels: How do learners manage interaction in paired speaking tests? *Applied Linguistics*, 35(5), 553-574.
- Honda, A. (2002). Conflict management in Japanese public affairs talk shows. *Journal of Pragmatics*, 34, 573-608.
- Mori, J. (1999). *Negotiating agreement and disagreement in Japanese: connective expressions and turn construction*. Amsterdam: John Benjamins.
- Mori, J., & Nakamura, K. (2008). Negotiating agreement and disagreement in Japanese: An analysis of designedly ambiguous turn completion points. In J. Mori, and A. S. Ohta (Eds.), *Japanese applied linguistics: Discourse and social perspectives* (pp. 52-79). London: Continuum.
- Sifianou, M. (2012). Disagreements, face and politeness. *Journal of Pragmatics*, 44(12), 1554-1564.
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shape. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action: studies in conversation analysis* (pp. 57-101). New York: Cambridge University Press.